

## 2. 菖蒲城跡出土の陶磁器について

菖蒲城周辺には後北条系の騎西城、花崎城跡、岩槻城跡、忍城跡などがある。なかでも、騎西城跡、岩槻城跡は継続的に調査が行われ、遺構や遺物も多数確認され、次第のその全貌が解明されつつある。

ここでは、これら周辺城館跡から花崎城跡と岩槻城跡の資料を、菖蒲城跡出土遺物の比較検討の材料として使用した。

本題に入る前に、菖蒲城の形成前の遺跡の状況についても若干触れておきたい。菖蒲城成立以前の出土遺物は、二つの時期が存在した。先ず第一は、9世紀代を中心とした古代である。ここでは、住居跡と掘立柱建物跡の遺構と須恵器甕・杯、瓦などが検出され、単なる集落と言うより、寺院などの可能性が考えられた。この古代の遺構の上には粘質の強い無遺物層が形成されており、氾濫等により古代の遺跡が廃絶した可能性が強いものと考えられた。第二として、鎌倉時代に至り、再び生活の場として、館ないしは寺院が形成されることが推測された。その根拠としては、13世紀後半代から14世紀の常滑、板碑などの遺物が検出されていることによる。板碑の存在は、館跡と考えるよりは、寺院が形成されたことを想定させるにたる資料と思われる。

このような、前史以上に多くの遺物が確認されたのは、戦国期の菖蒲城段階のことであった。さて、この菖蒲城であるが、新編武蔵風土記稿の記載を見ると、16世紀末の廃城の後には、田畑として使用されたとされ、調査でも民家などの生活痕跡を確認するころはできなかった。当然、出土遺物の中には近世以降の陶磁器類はほとんど含まれていなかった。さらに、遺物を含む土層の状況は、城郭廃絶時もしくは、廃絶後時期を経ない段階に堀跡や平場部を一気に埋めたと推測されるものであった。そのため、遺物は層位的に分類や遺構一括などの共伴関係を探る資料はない。このような、検出状況を念頭に遺物の分析を進めたい。

出土遺物は、産地により、大きく三種類に分類する

ことができる。(I)は在地産、これは生産場所がわからず、広くとも精々一国程度の流通範囲の焼き物である。(II)は国産陶器の瀬戸・美濃産陶器、常滑である。(III)は海外からの輸入陶磁で、そのすべてが中国産であった。

在地製品は、大半が土師質の皿で、「かわらけ」と称されるものである。破片数は千点を越え、遺物全体の91%であった。このほか、在地製品には、表面に炭素を吸着させた瓦質土器がある。製品としては播鉢、内耳土器である。播鉢は、17点ほどの破片が確認されたのみであった。内耳土器は、かわらけに次ぐ数が確認された。その形態は、耳が体部上位に位置する浅めの形態である。

国産陶器は、大半が瀬戸・美濃製品とわずかな常滑製品があった。瀬戸・美濃製品は瀬戸後期様式の灰釉皿、灰釉盤が数点確認されたのみである。大半は大窯製品であった。大窯製品は灰釉皿、天目茶碗、鉄釉皿、播鉢などがあった。灰釉皿は端反り皿、丸皿、鉄釉皿は丸皿、碁笥底の皿などであった。破片数としては、灰釉皿が最も多く50点近く確認されたが、個体数としては30点を大きく越える量とは思われない。端反り皿は、わずか3個体ほどであった。

天目茶碗は、破片数として7点と少なかった。

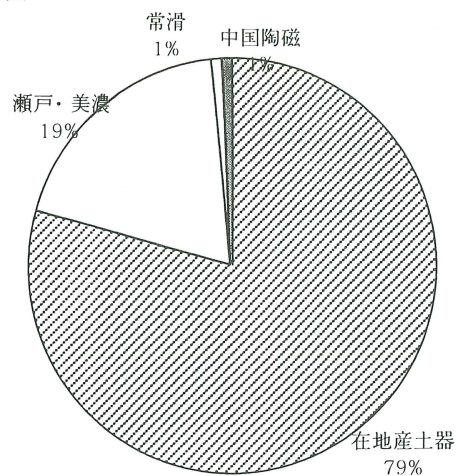
播鉢は、破片数にして、40点を越えたが、個体数としては、10点を大きく越えるものと思われない。

中国陶磁は、染付と白磁、青磁が確認された。青磁は蓮弁文碗、稜花皿、水注などの破片が確認された。白磁は坏、皿が確認されている。皿はいずれも小破片であった。口縁部の小破片であったが、赤絵が確認されたことは、注目に値する。

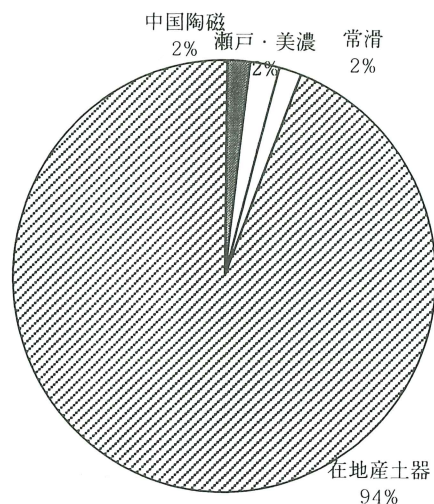
中国陶磁で最も多くの量が確認されたものは染付で、その大半が皿であった。皿は高台をもつ端反り皿で、唐草の文様のものが多く、染付皿B1群が主体である。碗は蓮子碗があるが、極めて少ない。

大まかに、産地別の遺物を見てきた。それでは、こ

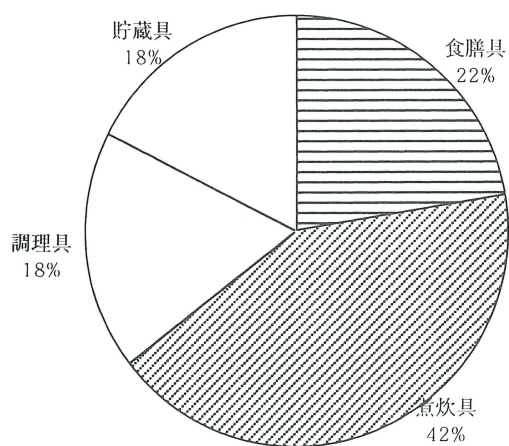
第67図



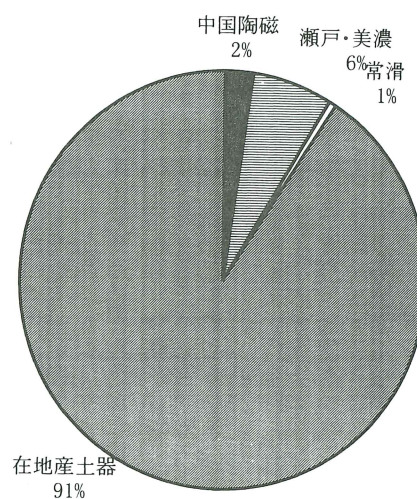
花崎城跡産地別構成比



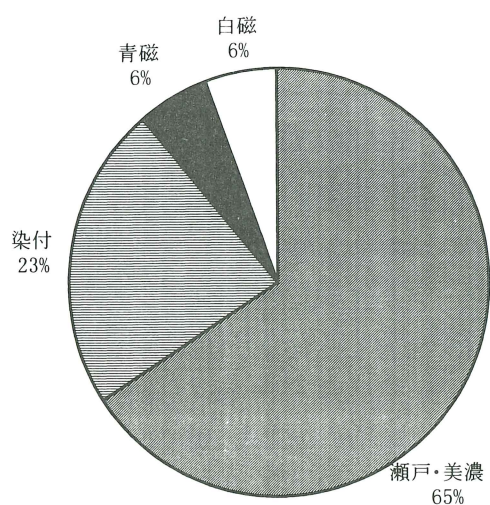
岩槻城樹木屋敷産地別構成比



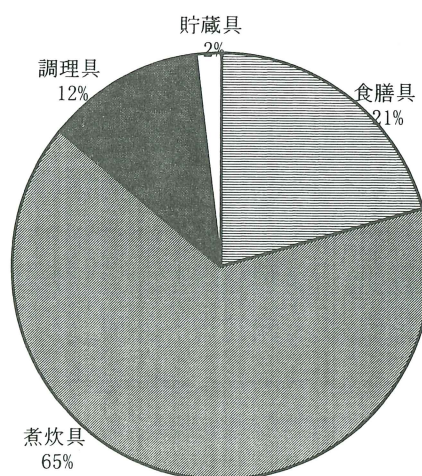
岩槻城樹木屋敷機能別構成比



菖蒲城跡産地別構成比



菖蒲城跡碗・皿構成比



菖蒲城跡機能別構成比



これらの遺物の年代について触れたい。

瀬戸・美濃製品は、最も古いもので古瀬戸後期の灰釉皿などで、15世紀後半代のものであった。大窯製品は、大窯Ⅰ期のものとして、端反りの灰釉皿があった。丸皿、鉄釉皿、播鉢、天目茶碗は大窯Ⅱ・Ⅲ期のものであった。ただし、Ⅲ期の製品はわずかであった。生産地編年では、15世紀末から16世紀後半とやや幅を持つが、大半が16世紀中頃を主体とする。

中国陶磁は、青磁製品が15世紀代のものであった。染付製品は、最も多く確認された皿が染付B 1群タイプのもので、型式編年では16世紀前半代頃に位置づけられる。白磁製品もやや幅があるが、16世紀前半代を中心とするものである。赤絵に関しては16世紀後半の時期である。

陶磁器は、15世紀後半から16世紀後半までの、ほぼ1世紀の年代幅があった。製品の伝世などの条件を考慮したとしても、この年代幅が即菖蒲城跡の年代幅と断定できないが、伝承や周辺の後北条系の城の成立と廃絶を比較すると妥当な年代と言えなくもない。

次に、岩槻城跡、花崎城跡の陶磁器組成と比較してみたい。これらの遺跡の出土遺物は、ほぼ菖蒲城跡と同時期のものである。(ただ、岩槻城と菖蒲城跡の組成表は破片数を遺物組成の基礎としたが、花崎城跡は報告書の図化点数を基礎としたことから、前二者と異なる傾向となったことに注意を頂きたい)

さて、菖蒲城跡と岩城跡では、ほぼ在地製品と搬入品の構成が近似した結果がでたが、菖蒲城跡では瀬戸・美濃の割合が中国陶磁に対して倍以上の量が確認された。さらに、花崎城跡では、瀬戸・美濃製品が中国製品の20倍近い割合を示したことに注目した。

さらに、花崎城跡が、菖蒲城跡や岩槻城跡と大きく異なる点は在地製品の割合が比較的lowかった点である。この違いは、先に触れたように報告書の図化個体数を基にした統計である点で割合に違いがでたものであろう。破片総量を再確認すれば、菖蒲城など同様に在地産の割合は増すものと思われる。基本的に在地製品の高い点は、どの城も変わらないものと考えたい。

次に、機能別に見てみよう。65%と破片数では、圧倒的に煮炊具が多い。煮炊具とは言ってもここでは、内耳土器である。その形態は極めて浅いことから、鍋と考えるよりは焙烙であろう。焙烙となれば煮炊具とは言えない。ここでは便宜的に煮炊具とした。煮炊具として使用されたのは、やはり鉄鍋を考えるべきであろう。食膳具については、別表を掲げたが、圧倒的に瀬戸・美濃製品が多い。次いで染付、青磁、白磁であったが、陶磁器の総個体数でも50を多く越える数ではないであろう。食膳具に関しては、注意すべき遺物として漆碗がある。漆碗は、いずれも木質部が朽ちて、漆膜が残るのみであったが、相当な数が使用されたと思われる、この製品こそが食膳具の主要な容器であった。

天目茶碗も食膳具としたが、その数は少なく、茶臼が数点確認されていることなどから、やはり天目茶碗は茶器としての機能を考えた方がよいだろうか。

調理具の破片数は、在地産の瓦質よりも大窯播鉢が倍以上の数確認された。この傾向は、岩槻城と似かよっている。一方、花崎城跡では、圧倒的に在地産の瓦質、土師質製品が多かった。県内の同期の遺跡では、在地産播鉢の占める割合の方が高いのが一般的である。

貯蔵具は、僅かな常滑甕の破片があるのみであった。

岩槻城跡、花崎城跡、菖蒲城跡とも貯蔵具の出土量は極めて少ない。この点は、騎西城跡など県内の同期の遺跡とも同様な傾向が出ている。このことは、結桶などの木製品が陶器に替わり、多用され始めたと考えべきであろう。

産地別組成と機能別組成の比較から幾つかのことが推測される。搬入品の瀬戸・美濃製品と中国陶磁を見たとき、岩槻城跡、菖蒲城跡、花崎城跡の順で中国陶磁の占める割合が高くなっている。さらに、播鉢を見たとき岩槻城跡、菖蒲城跡では瀬戸・美濃製品の割合が高いのに対して、花崎城跡では在地産の占める割合が高かった。搬入品の構成比の違いは、城郭の格の違いを思わせなくもない。同様に「かわらけ」は、遺跡の格の違いを考える上で、貴重な製品である。今後、城郭間での比較検討を試みたい。

引用・参考文献

- |           |      |  |
|-----------|------|--|
| 浅野晴樹      | 1991 | 「東国における中世在地系土器について－主に関東を中心にして－」『国立歴史民俗博物館研究報告第31集』 |
| 磯崎 一      | 1980 | 『下栢山遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第42集                              |
|           | 1981 | 『富士塚前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第43集                             |
| 小野正敏      | 1982 | 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』                  |
| 小幡 晋      | 1980 | 『武蔵の古城址 城址・砦址・館址』                                  |
| 片山寛明      | 1990 | 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑』第3巻中世                              |
| 斉藤慎一      | 1991 | 「本抛の展開 十四・十五世紀の居館と「城郭」・「要害」」『中世の城と考古学』             |
| 佐藤博信      | 1988 | 「古河公方・両上杉氏と武蔵」『新編埼玉県史 通史編2 中世』                     |
| 塩野 博      | 1968 | 『武蔵加納城址』埼玉県遺跡調査会報告第2集                              |
|           | 1981 | 『私市城跡』騎西町埋蔵文化財調査報告書第1集                             |
| 柴田龍司      | 1991 | 「中世城館の画期 館と城から城館へ」『中世の城と考古学』                       |
| 島村範久      | 1997 | 『騎西城武家屋敷跡 妙光寺第1・2次発掘調査報告書』騎西町遺跡調査会報告書 第2集          |
| 島村範久・嶋村英之 | 1996 | 『騎西城武家屋敷跡 第7次発掘調査報告書』騎西町遺跡調査会報告書第1集                |
| 鈴木孝之      | 1996 | 『深谷城跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第174集                        |
| 田代脩・武井尚ほか | 1993 | 『新編埼玉県史 図録』  |
| 田代脩ほか     | 1992 | 『図説日本の歴史11 埼玉県の歴史』                                 |
| 田中 信      | 1996 | 「川越市内出土の中世土師器皿について」『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(XI)』           |
| 土井義男      | 1991 | 「地域史研究と中世城館-武蔵・八王子城を素材として-」『中世の城と考古学』              |
| 中田正光      | 1983 | 『埼玉の古城址』   |
| 水野和雄      | 1985 | 「日本石硯考－出土品を中心として-」『考古学雑誌 第70巻 第4号』                 |
| 村田修三      | 1987 | 「城の発達」『図説中世城郭辞典 第1巻』                               |
| 柳田敏司ほか    | 1979 | 『日本城郭大系5 埼玉 東京』                                    |
| 加須市遺跡調査会  | 1982 | 『花崎遺跡』埼玉県加須市文化財調査報告書                               |
| 埼玉県       | 1986 | 「鎌倉大草紙」『新編埼玉県史 資料編8』                               |
| 瀬戸市       | 1993 | 『瀬戸市史陶磁史篇 四』                                       |
| 菖蒲町教育委員会  | 1986 | 『菖蒲町の歴史ガイド』  |
| 埼玉県立博物館   | 1983 | 『新装開館記念特別展 武蔵武士 図録』                                |
| 埼玉県教育委員会  | 1987 | 『埼玉県の城館跡』  |
|           | 1988 | 『埼玉の中世城館跡』   |
| 中世土器研究会   | 1995 | 『概説 中世の土器・陶磁器』                                     |